

## 研究ノート

# 哲学することから見える人間像

—— キリスト教は禁欲主義か ——

黒田 敏夫

### 序文

今まで、哲学の研究や哲学を教えてきたが、「哲学するということは、一体何か」ということを振り返ってみたいと思う。哲学するということは、偉大な哲学者の哲学・思想に立ち向かい、その解釈に多くの時間を費やしているが、これは現在の哲学をする人たちの現状ではないかと思う。私自身も大学時代からカント、デカルト、ヤスパース、ニーチェの哲学やティリッヒブ、ブルトマンなどの宗教哲学を学び始め、また生命倫理を学んできたが、そのように思う。

私が梅光学院大学に来るに際して、教職課程があるので、哲学の古典的なものをしっかりと教えて欲しいと言われた。そこで、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、デカルト、カント、ロックなどの哲学は最低教えていこうと思った。このことは私の専門性とも何ら抵抗はなく授業をすることはできた。

哲学するということは、私はカント研究や宗教哲学の課題に取り組むこと、そして授業を通して学生たちに哲学することを教えていくことであった。それは哲学思想における価値観、世界観、人間観、人生観を伝えていくことであった。

2005年に子ども学部が創設され、子ども学を探究していくことになった。子ども学を学ぶということと哲学することにおいては、少し違和感を覚えていた。哲学することは、かなり意識的・知的な作業であると思うので、子どもや幼児の哲学とどのようにつながるのか、深いところで不安もあった。しかし、幼児教育を学んでいく間にその不安は自然に払しょくされた。今では逆に幼児教育の方が哲学的ではないかと思っている。人間の自発性、主体性、自律性は人間の成長にとって最も根本的なものであり、その育成は教育の最大の課題だと思う。

哲学はその人間の自由、真の人間、ありのままの人間の姿を探究するものである。自由は人間の自由意志、行為、人間理性、人間の欲望の問題と深く関係する。この小論では人間のあるべき姿と人間の現実の姿の考察を念頭におきながら、理性と情念の総体である人間の求める宗教、信仰の在り方について考察していきたい。一般に宗教は禁欲的な生活を強いられるという印象があるが、果たしてそうなのか、偉大なキリスト教の宗教者パウロやルターの思想を学びながら哲学することを考察してみたい。

## 1章

人間は理性 (logos) と情念 (pathos) からなる存在であると言ってもよい。この二つの能力から人間存在を考察できるのである。

「ソクラテスの弁明」についての解説は定番なものになってしまう。ソクラテスの思想そのものは、ソクラテス自身が書いた書物がないので厳密には彼の思想はわからないが、弟子のプラトンのこの著作を通して本質的な部分はわかると思う。彼は人間の問題を初めて学問的な哲学の課題として体系的に述べたのである。彼以前に置いては、神話的に語られていた人間の問題が初めて学問的に、論理的・体系的に語られたのである。

ソクラテスは人間の本質を魂 *psychē* と考える。そして人間の魂が優れた状態にあることが徳 *arētē* であるとする。魂は善なるもの、真実なるものを求めながら生きていくことが求められる。本能や感情に支配されることは魂を曇らせてしまうのである。このようにソクラテスの論理的・体系的思想は禁欲的な思想であると言える。常に魂を配慮しながら、より善く生きていく倫理的な生活が求められる。ソクラテスの哲学は理性的、禁欲的な哲学といえる。

プラトンは哲学史上初めてと言っていいほど、明確に人間存在を神話的に、また同時にそれを超え哲学的に述べていったと言える。ソクラテスと同じように人間の本質は魂 *psychē* であると考えている。メノン篇で述べられているように魂は不滅の存在であり、元々イデア界に存在していたが故にすべてのイデアを知っていたのである。その魂が肉体と結びつくことによって人間になるのであるが、同時にイデアを忘却してしまったというのである。これは魂が学ぶということ、つまりイデアを知るということは、肉体と結びつくことによって忘れてしまったイデアを想起するということであると説明する。人間となること、肉体と結びつくことによって忘却してしまったということは魂にとって肉体と結びつくことは本質が見えにくくなってしまったことを表している。理性主義や禁欲主義にとって、肉体と結びつくこと、本能と結びつくことは、本質的な在り方から遠ざかってしまうことである。ソクラテスと同じように、理性主義、禁欲主義的な思想であると言えよう。

人間は生まれながらにして「知らんと欲す」と考えたアリストテレスは理性主義的な哲学者であり、すべての学問を体系づけた人とされている。アリストテレスの哲学が生物学的哲学と言われているように、彼は具体的に生きている生命そのものに目を向け、そのままの現象を受け止めている。人間存在を人間的魂 *psychē* と肉体的物質の総合と考えているが、人間的魂も「知らんと欲する」と言われるように、理性的であると同時に欲求的なものと考えている。つまり人間の欲求を積極的な意味でとらえていると言える。アリストテレスの哲学は理性的であるが禁欲的であるとは言い切れないと言える。禁欲的どころか生物の生きんと欲する欲求を積極的に認める哲学である。

いささか乱暴な見方であるかもしれないが、西洋思想はキリスト教的思想とギリシャ思想の対決と総合によって成り立っている。キリスト教からは愛の思想 (アガペーの愛) が、ギリシャ思

想からは、ロゴスによる科学思想と芸術、文学などの人間主義の思想が発達していったと言えよう。

## 2 章

ここで人間観、世界観、宗教観に関してストア学派の哲学とエピクロス学派の哲学について考えてみる。一般にはストア学派は禁欲主義で、エピクロス学派は快楽主義であると紹介される。ストア学派のゼノン（B.C.336-264）の哲学を見てみよう。ストアは超越的神観を否定し、汎神論的に、自然そのものを神的なものとして考えている。一切の存在の原理として「プネウマ pneuma」を考える。プネウマはすべてに浸透し、内在し、生命と理性をそなえた自己運動をする物質である。プネウマは物質、植物、動物、人間において段階的に現れているのである。ストア学派の目標は個人として正しい認識を得ることであり、賢者となることである。理性的に生きること、感情的、破壊的衝動に打ち勝つ生活が求められた。

ストアの思想は、キリスト教を世界宗教へと発展させていったパウロの時代にギリシャ・ローマの世界に広まっていた。パウロ自身もストア思想の教養をもっており、ギリシャ人やローマ人に対して、彼らが理解できるような言葉で宣教をしている。ローマの信徒への手紙の中から例に挙げてみると、1章20節に「世界が造られたときから、見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。」とあるように、汎神論的な自然観を見る事ができる。これはプネウマがすべてに内在するというストアの自然観をあらわす表現である。

神の子、イエス・キリストを通してのみ神を知ることができるというのがキリスト教信仰であるが、イエス・キリストを通さなくても自然から神の啓示をみることができるとしている。すなわち自然啓示を認める表現であるとも言える。

ストア思想の倫理説を見てみよう。ストアの賢者は、「正しい認識を求めて」生きることを目指し、「なにごとにも惑わされない完全に平静な心の状態」（アパテイア *apatheia*）の境地を求めて生きる。そのためには、「非理性的なもの、情欲的なものから自由になり、理性的本性に従って生きること」、「感情的なものから離れ、理性的に生きること」が要求されたのである。いわゆる禁欲的な生き方が要求されたのである。

パウロはローマの信徒への手紙7章18-19節で「わたしは、自分の内には、つまりわたしたちの肉には、善は住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている」と述べているように、肉の欲、欲望は私たちが正しい生き方から遠ざけており、それを退ける生き方、すなわち禁欲的な生き方をすすめる思想を示している。更に、ガラテアの信徒への手紙5章17-21節には「肉の望むところは、霊に反し、霊の望むところは、肉に反するからです。肉と霊とが対立し合っているので、あなたがたは、自分のしたいと思うことができないのです。しかし、霊に導かれているなら、あなたがたは、律法の下にはいません。肉の業はあきらかです。それは姦淫、

わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのもです。以前言っていたように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできません。」と霊と肉の思いが対立するものであることを示している。

パウロはストア的なロゴスとパトスを霊と肉の関係で述べているように、全くストア的というわけではない。ローマ帝国に支配された地域に伝道していくために、ユダヤ人にはユダヤ人のように、ギリシャ人に対してはギリシャ人のように、またローマ人に対してはローマ人のように福音を宣べ伝えていったのである。

新約聖書の思想はパウロによるものが大きく、パウロの思想が聖書の思想のように西洋思想に影響を与え、キリスト教信仰は禁欲主義であるという理解を多く生んだ。しかし、このあたりは慎重に吟味すべきところである。

パウロによるキリスト教信仰のギリシャ化はキリスト教信仰を広く全世界に宣教していくことができる神学を持つことができたと言える。イエス・キリストの教えが普遍化され、キリスト教が世界宗教となり、西洋思想に大きな影響を与えたと言える。

### 3章

次に宗教改革の神学者、マルティン・ルターの信仰を見てみよう。ルターはイエス・キリストの福音をパウロの理解にたっている神学者と言える。

ところでルターはある意味で日本の鎌倉新仏教における親鸞に並び称される宗教者ではないだろうか。親鸞は1173年に日野有範の子として生まれた。9歳から29歳まで比叡山で天台宗の修行生活を送っている。厳しい修行によって悟りを開こうとする自力本願の道を目指したが、自らの力で煩惱を克服することはできないと比叡山を降りるのであった。その後、難行苦行による修行ではなく、念仏をひたすら唱えよとする法然の専修念仏の教えに触れる。しかし、それにも満足せず、他力本願、絶対他力の境地に至るのである。これは親鸞の語録といえる「歎異抄」にある「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」と説く悪人正機説に見られる。善人は自己の能力で悟りの道を開こうとするものであり、仏に全面的に頼る心が薄くなるのに対し、悪人は自己の力では悟ることはできないということを知るものであり、仏の救済の力に頼らなければ救われないということを知るものである。この悪人こそ阿弥陀仏の救いの対象となるのである、という意味である。煩惱を捨てきれない自分、深い業を持ち続ける自分でさえ阿弥陀仏は救ってくださる、という境地である。このように親鸞は禁欲主義によって宗教的境地に至った宗教家ではないのである。

ルターは1501年にエルフルト大学に入学する。1502年9月に最短期間で教養学士となる。更に1505年1月に教養学修士となり、法学部の専門学部に進んだのである。一か月後、帰省後、エルフルト大学に向かう途中に、いなづまが鳴り響き、彼は地面に倒れ、恐怖の中で「聖アンナ様、お助けください。私は修道士になります。」と叫び、大学を辞め、修道院に入る決心をしたとされる。

彼はアウグスティヌス修道院に入り、「いかにして恵みの神を獲得するか」という問いを抱いていたと言われている。修道院に入り、1週間に2回、詩編の全編を唱え、聖書を読み、旧約聖書をほとんど暗記するまで読んだと言われている。修道院では「清貧」「貞潔」「服従」の生活をすることが言い渡され、まじめな修道生活を送った。1507年に司祭になり、同時にエルフルト大学で神学研究をすることを命じられ、修道士の生活をしつつ、大学で道徳哲学の講義を担当することになったのである。

ルターは常に大きな課題をもち、修道院に入り、神学を学び、研究していたのであるが、その中でも「神の義の発見」が一番大きいと言われる。ルターは修道士としての厳しい禁欲的な生活を通して、神の救いや恵みに対して疑問を感じていた。更に詩編講解の講義を進める中で神の義について新しい認識に到達する。それまでは「神の義」は自らの意志と能力をもって努力する人間を正しい、良しとする。しかし、彼はいくら正しい生活、厳しい生活を送っても「神の義」「神の恵み」を獲得できるという確信がもてなかったのである。詩編講解で彼が発見したことは、「神の義」とは人間の行いや努力によって神に認められるものではなく、「神からの恵み」であるということであった。この発見は、更に発展し、ローマ書講解で明確にされる「信仰義認」の確信である。ローマ書3章28節の「わたしたちは人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。」

人間は、自分ではどうすることもできない罪、自分の利益のためには神をも裏切る深い大きな罪を背負った存在である。

その罪から救われるのは、自分の努力や能力、行いによるものではなく、神から一方的に与えられる恵みによるのである。

人間は、そのように神の恵みによってのみ救われることを信じる信仰によって救われるのである。

ルターの宗教改革は当時のカトリック教会が免罪符を売ることによって金集めをしていたことに異を唱えることから広まった。免罪符を買うという行為によって、自分の犯した罪が許されると教会が述べていることが問題になる。人間の行為によって神の救いが得られると教会が考えていることになるのである。聖書の教えは決してそのようなものではなく、人間は神を信じ従っていく信仰によってのみ救われるとルターは叫んだのである。

## 終わりに

親鸞もルターも当時の慣習を破り、僧職や司祭職でありながら妻帯主義をとっている。彼らの苦しみは自ら背負う大きな罪意識であったと言える。禁欲的な厳しい修行を行っても魂の救いが得られないという大きな不安を持ち続けた人であった。このように理性的な禁欲主義の生活によっては神の救いにたどりつけないと確信した人たちである。人間はどのような生活や生き方をしても、人間の努力や行為によって救いは得られないと確信したのである。人間の罪の大きさを感じるだけに、その罪を許すことができるのは、一方的な神の恵みしかないと確信したのである。

この神の恵みに対する宗教的な確信に至る道は禁欲的な生き方や人間の行為や努力ではない。自分の罪の大きさを自覚し、救われるに値しない絶対矛盾の存在である自分を自覚し、同時にそのような自分が生かされ、救われるのは神の恵み以外にない、と信じることである。

このような小さな素朴な宗教的な生き方は禁欲的生き方というより、小さな恵みを感じ取ることができ、小さな幸福に満足して生きていける快樂主義の生き方と言えないであろうか。

パウロとルターの信仰論の考察には宗教哲学的考察が求められる。人間の現実の一つである。理性 logos と情念 pathos の総体が人間である。理性は道德を求め、宗教は人間の自己矛盾的・有限の人間存在の現実と、その救いを示す。

人間存在の深みは宗教的存在として示される。シュライエルマッハーは宗教を「絶対依存の感情」として考え、ティリッヒは「究極的関心」と考え、人間存在の豊かな深みを考察して行く。

#### 参考文献

- ・プラトン「ソクラテスの弁明」岩波文庫
- ・アリストテレス「形而上学」講談社学術文庫
- ・聖書 日本聖書協会
- ・親鸞「歎異抄」岩波文庫
- ・徳善義和「マルティン・ルター」岩波新書、2012年
- ・ルター「キリスト者の自由」岩波文庫
- ・金子晴勇「宗教改革の精神」中央新書
- ・シュライエルマッハー「宗教論」岩波文庫
- ・ティリッヒ「存在への勇気」新教新書